

北海道胆振東部地震発生からの動き

2018年  
9月6日03:07  
「北海道胆振東部地震」発生  
03:25 全道ブラックアウト

9月8日  
第一陣（3名）が現地入り  
安平町災害ボランティアセン  
ター立ち上げ決定

9月9日  
安平町災害ボランティアセン  
ター立ち上げ支援開始

9月11日  
厚真町避難所での子どもプレー  
パーク開始  
通称：ハッピースターラン  
（2019年7月からはあつま冒険  
の杜へ移行）

9月18日  
厚真町放課後児童クラブでの活  
動開始（9月25日まで）

9月22日  
乾燥野菜を厚真町の炊き出しへ

9月24日  
むかわ町穂別放課後児童クラ  
ブでの活動開始（10月30日ま  
で）

11月3日  
安平町・むかわ町穂別地区で  
の子どもプレーパーク開始

12月～  
あつま野菜防災・乾燥野菜プロ  
ジェクト開始

2019年  
3月1日  
「厚真ナイト」開催

4月～  
「厚真シカ柵再建プロジェク  
ト」開始（6月末まで）

5月17日  
第一回被災地支援に取り組み  
北海道ユースミーティング

6月14日  
第二回被災地支援に取り組み  
北海道ユースミーティング

7月12日  
第三回被災地支援に取り組み  
北海道ユースミーティング

7月15日  
「厚真冒険の杜」プロジェクト  
開始

安平町、むかわ町での活動



安平町災害ボランティアセンター立ち上げ

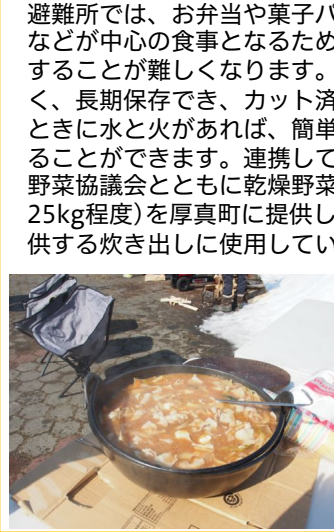
全国からのボランティアの窓口となる災害ボランティアセンター立ち上げとして、イベント現場等での経験を活かし物資提供と本部設営支援を実施しました。



安平町、むかわ町プレーパーク

安平北進の森・むかわ穂別地区において、プレーパーク・放課後児童クラブでの活動を実施。道内外からの参加者が25回に渡り、子ども達と活動しました。

厚真町乾燥野菜普及活動



乾燥野菜を使った豚汁の炊き出し

避難所では、お弁当や菓子パン、即席めんなどが中心の食事となるため、野菜を摂取することが難しくなります。乾燥野菜は軽く、長期保存でき、カット済み。使いたいときに水と火があれば、簡単にスープを作ることができます。連携している澄川乾燥野菜協議会とともに乾燥野菜2.5kg(生野菜25kg程度)を厚真町に提供し、避難所で提供する炊き出しに使用していただきました。

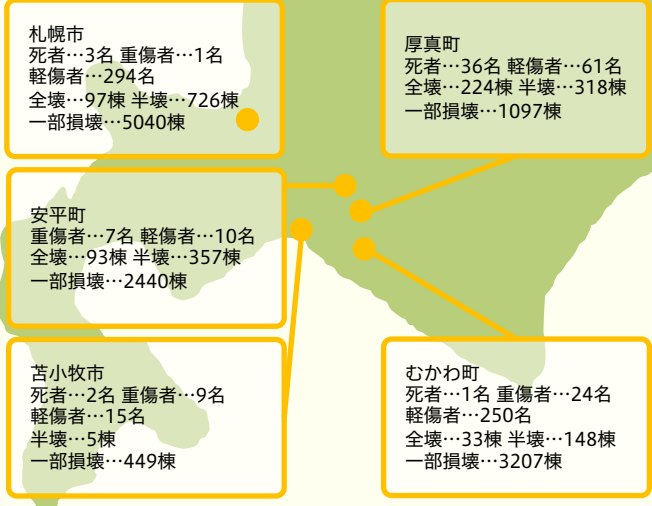
あの時何が起きたのか

地震発生時刻：2018年9月6日(水)3時7分  
震源位置：胆振地方中東部  
マグニチュード：6.7  
最大震度：7

7…厚真町 6強…安平町・むかわ町  
6弱…札幌市東区・千歳市・日高町・平取町  
死者…44人 重傷者…51人 軽傷者…731人  
建物被害（住家等）：  
全壊…479棟 半壊…1,736棟  
一部破損…22,741棟  
住民避難：累計16,649人  
最大停電戸数：約295万戸(全戸)

断水：最大68,249戸(44市町村)  
農林水産関係の被害情報：1,145億円

参考：  
内閣府『平成30年北海道胆振東部地震に係る被害状況等について（平成31年1月28日15:00現在）』北海道総務部危機対策課『令和元年北海道胆振東部地震による被害状況等について 第121報（令和元年9月5日現在）』



# Rock The Life! ezorock

2019.09 vol.32



## 特集 北海道胆振東部地震 支援活動報告レポート

2018年9月6日「北海道胆振東部地震」が発生しました。NPO法人ezorockでは、発災2日後から今までの活動の中で培われてきたつながりを通じ、様々な分野で活動を展開してきました。今回は、その中でも厚真町での2つのプロジェクトを中心に報告します。

今月の写真  
厚真町、むかわ町、安平町での活動の写真を集めました。

代表の小言

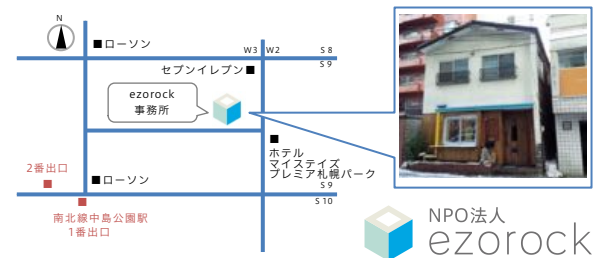
落書きノートより

約1ヶ月間実施した厚真町での滞在型長期ボランティアプログラムが終了しました。長い人で2週間、平日は放課後子どもセンターのボランティアをメインに、週末は森のようちえんや、自然体験などのいわゆる学校の現場ばかりを様々な教育の現場ばかりを経験する内容です。

そのため、今回参加した人の多くに「今までの現場では、この遊びはNGだったけど、今回の現場は自由だからOK!？」と、ん、どういふこと!？」といった葛藤が生まれます。そして、毎夜、振り返りをしながら、自分たちなりの答えを探していきます。

この一連のプロセスは決して楽な時間ではありませんが、参加した人は帰るころに、以前とは違った自分の考えを語れるようになっていく人が多く見受けられました。このプログラムは来年もまた実施する予定です。興味がある人は、参加したメンバーの葛藤を記録した「落書きノート」が事務所にありますので、ぜひ一読をおススメします。

草野 竹史





避難所の裏に生まれた奇跡の遊び場  
ハッピースターランド

## ハッピースターランドの軌跡

### ハッピースターランドの誕生

地震発生後、まちにはずっと緊張感が漂っていました。避難所生活が続き、大人たちは地震の対応に追われる中、子どもたちの居場所を確保すること大きな課題に。そんな中、当時厚真町の嘱託職員であった斎藤烈さんが避難所の一角にけん玉を20個持ち込み、子どもたちを集めて遊び始めました。これがハッピースターランド(以下、ハピスタ)の始まりです。9月7日の夜、斎藤さんは、SNSでまちの状況を発信。その情報が瞬く間に広がりを見せ、翌日にはその情報を見た多くの人が厚真町へ駆けつけました。斎藤さんが中心になり、駆け付けた多くの仲間と共に、避難所となっていた「あつまスタードーム」横の広場にテントやタープが設置され、子どもたちの居場所づくりが本格的にスタートしました。

### ハッピースターランドでの日常

テントやタープの他にも、焚火台、薪割り機、スラックライン、手作りブランコ、けん玉など日を追うごとにいろんなコンテンツが用意されていきました。また、噂を聞いた人々が応援をしたいとハピスタを訪れ、忍者体験、馬搬、キャンドルづくり、アナログゲーム、おやつ作り、バルーンアートなど様々な活動を提供しました。ezorockからもたくさんの方々が、子ども達と遊ぶお兄さんお姉さんとしてハピスタを訪れました。ハピスタの一日は焚火にまず火をつけることから始まります。その焚火を囲み、朝のあいさつをして、みんな思い思いに遊び出す。広場の中に小川が流れていて、そこでドジョウすくいをすることが人気の遊びになっていました。厚真の子どもたちは学年を超えてみんな仲が良く、被災地であることを忘れるくらい楽しそうな声で毎日あふれる場所となっていました。



▲近くの小川でドジョウ捕り

### 子どもだけではなく、多くの人の安らぎの場に

日が経つと、楽しそうに遊ぶ子どもの傍ら、中心にある焚火の周りで一息つく大人たちの姿も見られるようになりました。子どもの居場所としての役割のみでなく、大人にとっても地震のことを忘れ、心を休められる場所となっていました。こうして、町内外の多くの方が関わり続いていたハピスタは、学校が再開した後もイベント型プレーパークとして子ども達の居場所になっていきました。

本事業の一部は社会福祉法人中央共同募金会 赤い羽根「災害 ボランティア・NPO 活動サポート募金」助成事業を活用しています。

## Volunteer voices

2011年に地元福島で東日本大震災を経験した僕は、その後、ふくしまの子どもたちを支援する「ふくしまキッズ」という活動に関わりました。そうした経緯もあり、自然と被災地に足を運んで活動をしたくなりました。被災していることを感じさせずに、無我夢中に遊ぶ子どもが印象が印象的でした。そのため、活動は被災地支援という感じはあまりしませんでした。継続して活動に参加することで、子どもたちが顔を覚えてくれて、安心して遊んでくれるようになって嬉しかったです。



橋本直也(くう)



▲薪割りコーナー



▲子ども大人も一緒にたき火を囲む



▲ハンモックで遊ぶ子どもたち



▲冬の雪の中での活動



20kmのシカ柵を総勢200名で建て直す  
シカ柵再建プロジェクト

## シカ柵再建プロジェクトとは

農業を基幹産業とする厚真町では、町を囲む山々から下りて来るシカから獣害を予防するため、町内には約400kmの防鹿柵(以下、シカ柵)が設置されています。この山と畑の間に設置されているシカ柵の内、約40kmが地震後の土砂崩れで崩れたり流されるという被害が出ました。そこで、雪解けから農業が本格化するまでの期間で、農家、地域の方、行政、そして町外からのボランティアが協力し、「厚真の畑を守る！シカ柵再建プロジェクト」を行いました。

5月GWの第一弾と6月の第二弾の2回に分け、延べ13日、ボランティア参加者延べ228名という大きなプロジェクトになりました。ほぼ毎日参加している方や、厚真町に滞在してこのプロジェクトに関わっている人など、道内外様々な場所からの参加者で、作業ペースは日に日に早くなり、無事予定していた全てのシカ柵を張り終えることが出来ました。

また、山から畑へ流入した土砂の上という、災害の影響を受けている最前線の場所でポールや網を使いシカ柵を建てながら、一緒に作業する農家の方から、「土砂が流入してしまった畑は長くて6年後まで農業できない」など発災当時のお話や今後の町や農業についてのお話を聞く場面も見られました。



▲農家のみなさんと協力しながら作業を進めます



▲水田に被害が出ないように、田植え前に実施

## Volunteer voices

現地に向かう道中で見た山の土砂崩れや地割れはここで地震があったことを物語っており、衝撃を受けました。学生や地域の方々、ezorockを中心に各方面から人々が駆け付け、日が落ちるまで鹿柵作りに励みました。特に、お昼休みはお互いを労いながら、発災時の活動の様子を知ることができ、とても貴重な経験でした。



三河はるか(はるか)

GWの活動に参加して、初めて厚真町に訪れました。その時の厚真町は、当時のままになっている所があり、地盤が崩れて傾いた林や、土砂で崩された建物が残っていて衝撃的な光景でした。鹿柵を立てる時は、農家さんや厚真町に住む方々と話し合っって作業を進め、厚真町の方々の暮らしを身近に感じられる体験だったと思います。6月29日無事鹿柵が建て終わり、今後はこの経験を生かして次のプロジェクトにも関わって行きたいと思います。



島田朋哉(チャン)

## 厚真のこれから

### 地震発生から1年

未だ復旧工事や仮設住宅等地震の影響を感じさせる現地でも、発災から1年を迎えました。行政では、今後のまちづくりの基盤となる「災害復興計画」を策定。また、子どもの居場所づくりや地域サロン等、町内外の方が立ち上がり新たな取り組みが始まっています。

### 冒険の杜プロジェクト開始

厚真町では、「日本一の放課後」を目指して「厚真冒険の杜プロジェクト」が始動しています。地震の影響を受け、未だ遊べない遊具や公園がある厚真町で、子どもたちと一緒に育ち続ける遊び場を作っていくプロジェクトです。

森の中に町内外の方がそれぞれ持っているコンテンツを持ち寄り、これからの厚真や子どもたちの未来を考えながら、子どもたちを中心に周りの大人たちにとってもわくわくする空間を作っていきます。これからの厚真に関わってみたい方は、ぜひ一度私たちと一緒に冒険の杜を訪れてみませんか。



▲放課後児童クラブの建物前のウッドデッキをみんなで作る様子



▲森の中でターザンロープをして遊ぶ子どもたち